

「ナショナリズムについて」

2016年02月11日

哲学者の萱野稔人氏が『成長なき時代のナショナリズム』を著し、ナショナリズムを問い直すことを提唱している。ヘイトスピーチや移民排斥、また強硬な安保・外交政策などの右翼的言動を「ナショナリズム」として批判し、「ナショナリズム、即、悪」という観念に捉われている。とりわけ、リベラル派の知識人やマスコミの間で、自明なものだとされ、図式化されている。しかし、ナショナリズムは「国家は国民のものである」という発想に基づいている。特定秘密法案が審議された時、政府の情報は国民のものだから、隠すことは許されないと主張された。安保関連法案が審議された時も、憲法違反で、政府を縛る立憲政治が壊れると批判された。萱野氏は、安保関連法に賛成する立場だけがナショナリズムではなく、反対する立場も「国民主義」という意味においてナショナリズムであると言う。その通りである。私は、特定秘密法にも安保関連法にも反対してきた。日本を愛しているからである。私は自分をナショナリスト（愛国主義者）だと思っている。

韓国の軍事政権下、若者たちは民主化を求めて壮絶な闘いをした。彼らは「民主救国」と、民主化することによって、韓国を救うのだと言った。熱烈なナショナリストである。彼らを否定する人はいない。ナショナリズムは国民が主権者であり、それを貫徹したいと考えることである。ここでは、国民が平和的に生存権を確保できることを主張している。ただ、その主張が他国、また他国の人々を排除、否定する時には「否」と言わざるを得ない。ナショナリズムは自国民の安全と平和だけでなく、他国、他国者からも支持と賛意が得られるものでなければならない。その意味において、大国の身勝手な国益中心のナショナリズムには大いなる「否」を言い表したい。米国は3・11の同時多発テロを受けた時、星条旗を掲げ、熱烈なナショナリズムが吹き荒れた。テロの首謀者と見なされたビン・ラディンと仲間のアルカイダがいるアフガニスタンを猛爆した。大量破壊兵器があるとしてイラクを攻撃し、フセイン政権を倒した。その結果、IS（イスラム国）が台頭して来た。米国を中心にした有志国連合が世界を不穏にしたことは確かである。今や、攻撃されそうになったら、先制攻撃も許されるという状況である。大国の横暴なナショナリズムを許すと、その陰に無辜の市民の計り知れない犠牲が生じる事実を認識すべきである。

聖書は偏狭なナショナリズムで書かれていることが多い。モーセの説教とされた申命記7章1節、2節で「あなたが行って所有する土地に、あなたの神、主があなたを導き入れ、多くの民、すなわちあなたにまさる数と力を持つ七つの民、… をあなたの前から追い払い、… あなたが彼らを撃つときは、彼らを必ず滅ぼし尽くさねばならない。彼らと協定を結んではならず、彼らを憐れんではならない」と、驚くようなナショナリズムを勧めている。神に選ばれたイスラエルを高く評価し、他国を蔑み、排除する文言は数限りない。当時は、むき出しの暴力で他国を侵略する時代であったから、ナショナリズムを高揚し、国家を統合し、他国と対峙しなければならなかったことは理解できる。その反面、ナショナリズムは普遍性を持つべきであるという主張もある。北イスラエルを滅ぼした憎いアッシリアの首都ニネベの人々がヨナの裁きの預言によって悔い改めた時、神は裁きを止めた。預言が外れ、立つ瀬がないと怒るヨナに対し、「どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから」と、あなたの敵国ニネベの住民をも愛していると諭している。ナショナリズムは誰にどのような作用をもたらすのかを真摯に考える必要がある。